

妄点(試し読み)

大文妄



目次

僕と彼女の物語	菱野隆弘	5
君と僕との物理距離	えむぼーど	9
雨	井上大和	13
魔法少年の降る夜	ぺたへるつ	15

僕と彼女の物語

菱野隆弘

知的な創造が世界で一番価値あるものだ。

僕は貨幣経済を教科書でしか知らない。

Gが手渡したメモリデバイスには彼の書いた原稿用紙一枚半の物語が入っている。販売員はそれを端末に差し込むと鑑定結果と容量を確認した。「はい。甲級ランク632文字。確かに頂戴いたしました。オプションが選ばれていますか」

「いやないな。乗ればいいんだ。余剰分は取っておいてくれ」Gは販売員から鍵を受け取ると今買ったペンツに乗り込んだ。

先ほどから横で同じようなペンツを買おうとしている中年の男は、どうも少し足りない枚数をまけてもらおうと店員と格闘しているようだ。

(二万枚あるのにとか聞こえたな。物語としては丁級もいいところの粗悪品。よくこんな店に入ろうと思ったな、才能の無いものの分際で)

暇つぶしにもならない男だった。Gは興味を失い、ペンツを発進させた。急いで帰らなければ。明日も早くか

ら編集者が原稿を取りにやってくる。

朝起きて朝食もそこそこに、愛用の万年筆を取り出した。専業作家になる記念に、Bから貰った世界で一本の名前入り万年筆。インク瓶のふたを開き、インクを付けてみると、自分は作家なのだという自負が溢れてくる。しばらく物語を一字一字しっかりと原稿用紙に刻み付けていると、背中の方で部屋のドアが開く音がした。

「先生、本日の原稿を受け取りに参りました」編集者のKが頭を下げた。

「そこに二、三十ほど作っておいた。持って行ってくれ」Gは原稿用紙から振り向きもせず段ボールの山を指し、追い払うような仕草をした。Kもこのような応対には慣れっこだったし、機嫌を損ねて明日の原稿を他社に廻されたりなどしたら確実に首が飛ぶので、静かに箱を持ち上げそそくさと部屋から出て行こうとすると、紅茶を持ってきたBと鉢合った。

「あらKさん、もうお帰り？」注いだ三人分の紅茶をトレーに持ったまま、Bは尋ねた。

「あ、はい」

「紅茶でもどうかしら」 Bはせっかく入れたから、と付け加えたが、Gの「やめろ。そんな奴に振舞う水分があったら庭にでも撒いとけ」という言葉を聞きKは「では」と去って行った。幾分寂しそうな後ろ姿であった。

Kが歩き去る足音を聞きながら「そんな言い方ないんじゃないの？」とBはGのデスクに紅茶を置いて嘆息した。「せっかくお仕事されに来たのに」

「出版社なんて人の働くところじゃない。所詮は物語を生み出せないゴミ屑どもの集まりだ」 Gは右腕にはめた時計を見ると「もうこんな時間か。今日はこのあたりにしておこう」と万年筆を置いた。

「お仕事終わり？ じゃあちよつと市場まで出かけない？ 買いたいものがあるの」

「君はいいのか？」 Bは普段ならまだ働いている時間である。

「いいの。今日は早く閉めちゃった。いつもより少なかったから」

「そうか。ちよつと待っててくれ、シャワーだけ浴びて

くる」 Gはそう言うのと椅子から立ち上がって伸びをした。

「着るもの適当に置いておくわね」 Gには壊滅的に衣装のセンスが無いので、外に出るときはいつもBが選んでいる。

「頼んだ」 GはBの頬にキスをするとそのままシャワールームまで歩いて行った。

(続く)

君と僕との物理距離

えむぼーど

恋つてものを、計算機でシミュレートしたことがある。独自の解釈を加えた、セル・オートマトンだ。

人間になぞらえたオブジェクトをマス目状に配置し、それらに様々な値を持たせる。オブジェクトはある一定のルールでマスを移動し、他のオブジェクト、つまり恋人候補と出会う。持っている値、コンテキストが近ければ近いほど相性が良く、カップルとなりやすい。ちょうど、趣味が同じで気が合って付き合うようなものだ。そして、カップルになるとその情報の一部を交換し、場合によっては子どもを成し、死滅する。

僕とユリカは、大学院で出会った。ともに計算機科学の専攻で、彼女はOSまわりの研究を、僕は計算アルゴリズムの研究をしていた。彼女は紅一点、それもなかなか容姿が整っている。学部時代から論文を投稿しているような才女。一方で、僕は典型的なコンピュータオタク、アメリカで生まれていればきっとナードと呼ばれていただろう存在だ。

そんな高嶺の花のユリカと僕が仲良くなったのは、僕

が作っていた恋愛シミュレーションプログラムがきっかけだった。

「あなた、いつも何を熱心に作っているの？」

僕が、大学近くのバーでビールを片手にプログラムを直していると、ユリカが声を掛けてきた。僕は、ユリカに声を掛けられたことに内心驚いたけれど、それを気取られないように、落ち着いた声で応えた。

「恋愛シミュレーションプログラムだよ。僕オリジナルのセル・オートマトン」

そう言っ僕が画面を見せると、ユリカは興味深そうに画面を覗きこんで言った。

「……これで、何か分かるの？ 恋とか、人間の心の動きとか」

そんなことを真剣な顔で言うので、僕は笑ってしまっ

た。「まさか。趣味で遊んでいるだけだよ。ただ、僕も恋とか愛とかっていうのを、計算機で表現できたら面白いな、っと思うけれど」

そんな僕の言葉に、ユリカは首を傾げて言った。

「そんなにおかしいかしら。結局人間だって計算機みたいなものじゃない。脳の神経が電氣的なやりとりで、意識があるのだと、心があるのだと錯覚しているだけ。もし、恋の芽生えるアルゴリズムが分かったら、本当に恋だってシミュレーションできると思わない？　そして、計算機も恋ができるようになれば、すてきだと思う」

僕と彼女は、どうやらコンテキストが近かったらしい。顔を合わせるたびに話をするようになり、気づくと彼女と毎日のように会うようになっていた。

(続く)

井上
天和
雨

夢、という言葉がある。一般的には、寝ている時に見る方と、将来とか、そういうものに向けて抱く方の、二つの意味がある。でも僕は、この二つの差異を認めていない。後者を、世間の人々は子供に押し付ける。押し付けられた子供は、無知だから、大きくなったら何になりたいたとか、将来への希望だとか、そういう叶いもしないものになうつつを抜かす。無駄な努力をする。僕だつてそうだったんだ、誰だつてそういうものだろう？ そのうち、今自分がいる場所からは、どうやったつて届かない存在というものを認識しはじめ、ここで悩んだり色々するがそんな事はどうでもよくて、最終的には、自分が出る事の中で何かしら妥協点を見つけ、現実と折り合いをつける。夢から覚める。大体の人がそうだ。そうに決まってる。そうじゃない人は異常だ。ほら、そうしてまた次の世代が無意味な固定観念のもとに、夢見ることを強制されるんだ。イヤだね、全く。ともかくそれが、前者における、自分の意思とは無関係に落ちていく夢の世界が時間の経過とともに消えていくプロセスと、何が違

うだろうか。

「子供の頃に見てた夢つてのは、一体なんだつたんだらう」

僕はいたつて簡潔にまとめた。おしゃれな内装とは裏腹に、サークルの同輩や後輩から放たれるひどく下品でやかましい声が飛び交う居酒屋であつたが、僕らの座っている辺りは、逆に不自然なほど静かなものであつた。隣に座っていたYは、僕の言葉を聞くと小さく笑い、それからタバコの煙を大きく吐き出して、言つた。

「なにさ突然、感傷にでも浸つてんの？」

「そんなんじゃないよ」

(続く)

魔法少年の降る夜

ぺたへるつ

天上に、輝く星はない。

月すら雲に隠れて空は漆黑。地上は物寂しい夜の帳に覆われている。明かりはわずか。ただ、整然と立ち並ぶ街灯が、住居の窓から零れる光が、わたしの進むべき道——いや、進むしかない道を浮かび上がらせている。道。住宅地を編み目のように走るアスファルトの道は、まるでわたしを絡め取る蜘蛛の巣だ。わたしは獲物。囚われ、しかし逃げることもできず、ただもがくしかない哀れな虫けら。

わたしは逃げていた。

夜道をひたすら、裸足のままで逃げていた。足の裏が痛い。きつと、小石が刺さって血が出ている。でも立ち止まることなく、できるはずがない。

振り返る——二軒ほどの距離を置いて、ソレがいる。闇よりもなお暗い漆黒の塊が、爛々と大きな双眸を光らせている。ソレはまるで大型トラックのような唸り声をあげて、執拗に、どこまでも、いつまでも追ってくる。

理由は知らない。

わけがわからない。

しかも、ソレは弟の部屋から現れた。

わたしは、もう随分と弟の姿を見ていなかった。

ただ、隣の部屋からひっきりなしに聞こえてくる物音が、彼の存在をわたしの意識に縫い止めていた。物音。それは泣き声のようでもあったし、何かを叩くような音でもあった。時に弱々しく、時に激しく。それで、わたしは眠れないこともあった。両親に訴えても悲痛な面持ちで首を横に振られるだけで、それどころか、わたしに問題があるみたいに諭される。なら直接なんとかしようと思つても、弟の部屋の扉はコンクリートで塗り固められているかのように閉ざされていた。

そして、今日。

両親が揃って留守にした夜。弟の部屋から聞こえてくる物音は、物音というレベルを遙かに超えた。巨大な衝突音と、凄まじく甲高い金属音。ついにわたしは我慢出来なくなつた。

もう、このままではおかしくなつてしまふ。

覚悟を決めて弟の部屋へ行くと、あれほど開けられな

かつた扉が簡単に開いた。わたしは「いい加減にしろ！」と怒鳴り込んだ。でも、中にいたのは弟ではなかった。

暗黒色の塊が、爛々と双眸を光らせていた。

しかも、ソレはわたしがけて襲いかかってきたのだ。自宅を逃げ出したわたしは、助けを求めて絶叫し、救いを願って幾つかの門戸を叩いたが、返事はおろか、物音一つ返ってこなかった。世界の全てが石に変わってしまつたかのように、わたしとソレ以外の全てが冷たく無関心な塊になっていた。だからわたしは、逃げ続けるしかなかった。

これは悪夢。

悪夢としか思えない——でも、小石で裂かれた足の裏の痛みは、否定しがたい現実だった。

(続く)

妄点 vol.8

発行日	2015年05月04日 第一刷発行
頒 価	50円
編 集	大文妄
発行所	太陽村第二収容所
公式サイト	http://www.bunmow.net
連絡先	bunmow@hogefuga.net
